

水稲種子の良質安定生産の確立

鳥取農業改良普及所

1. 取組の背景

A種子組合は、40年以上の歴史があり、県内の水稲種子生産をほぼ一手に引き受けてきた（現在うるち・もち計6品種、採種圃面積約106ha、78戸、平坦地～標高300mまで10集落以上にわたる。）。

しかし、平成21年までの数年間は成績不振の年が多く、その主な理由は倒伏による充実不良、内穎褐変病など穂枯れ性病害による外観不良、種子伝染性病害などであった。

良質種子の供給と種子生産者の所得向上のため、早急な改善が必要となっていたもので、JA・県など関係機関と連携して改善に向けた取り組みを行った。



写真1 内穎褐変病罹病粒



写真2 研修会

2. 活動内容

(1) 平成22年、23年

種子組合役員会にて、倒伏、低い精糲率、穂枯れ症状での種子不合格など、連年の成績不振の改善につき協議した。そこで、まず特に倒伏の多かった早生種について22年から施肥を削減する提案を行った。

施肥を削減して生育量を減らすことには、倒伏軽減の他、面積当たり糲数を制限して糲の充実を良くする、穂枯れ性病害による糲の汚れを軽減できる、などの効果がある。

元肥削減に加え、穂肥も削減且つ遅延させて前述の効果が大きくなるよう図った。次いで翌年の役員会では、中生品種においても施肥を削減するよう提案した。

採用したばかりの2品種については、施肥等実証圃を設置した。

(2) 平成22年～24年

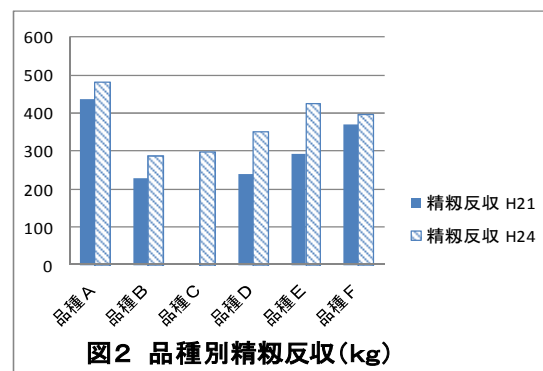
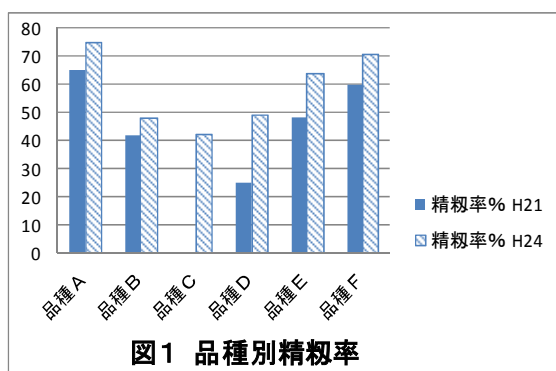
年1回の春期の全体研修会、夏期地区別現地指導会に加え、重点集落指導会などで指導するとともに、年数回の技術情報チラシ発行を行った。

施肥削減指導に対する農家の実施状況をトレーサビリティのための栽培管理記録でチェックした。

穂枯れ性病害の中でも近年問題となっているもみ枯細菌病については、病害虫担当の革新支援専門員と協議し、種子消毒剤の補強と、本田防除の充実を図った。

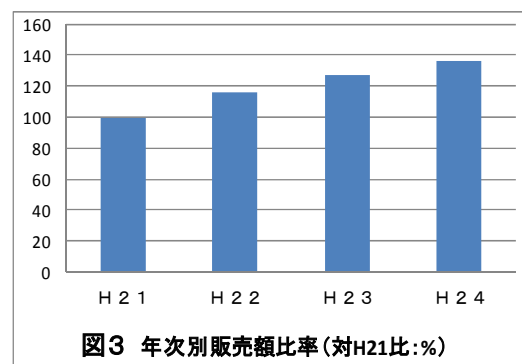
3. 具体的な成果

- (1) 管理記録を確認した結果、施肥削減はほぼ指導どおりなされている。
- (2) 施肥削減によって、倒伏が減るとともに、内穎褐変病による籾外観不良での不合格も減少している。
- (3) 籾はより充実し、精粳率（粗粳に対する精粳（2.3mm網目篩い上）の重量比）、精粳反収が向上した（図1、2）。
- (4) 多肥により総籾収量の増大を狙うよりも、少肥で歩留まりを高める種子生産の有利性の理解が進んできた。
- (5) 以上により種子合格率が向上し、採種面積がほぼ変化ない中、組合の販売収入は年々増加した（図3）。



4. 農家等からの評価・コメント (A種子組合、組合長)

「平成22年以降、普及所、農業試験場、生産振興課等関係機関との協力体制の下、種子籾の向上が図られた。温暖化による高温障害等の課題はあるものの、より一層の品質向上を目指し努力していきます。」



5. 現状・今後の展開等

温暖化により、次第に発生が多くなってきた種子伝染性病害があり、防除意識の醸成と合わせて、効果の高い防除対策を関係機関と作っていく必要がある。

また、種子農家の世代交代が進んでおり、技術レベルの維持向上を組合と協調して図っていく。

(執筆者：川尻 寿)